

Newsletter



附属学校ニュースレター

第18号・2014年 冬

大学入試センター試験の「廃止」によせて

理事・副学長 小路田泰直

あと5年もしたら、大学入試センター試験がなくなると聞いて、今日本の大学の多くが困惑しています。ではどうして受験生の学力を判定すればいいのか、わからないからです。当然奈良女子大学も困惑しています。「人物本位でとれと言われてもなあ」という、ため息まじりの声があちこちから聞こえてきます。

ただ私は、ついに来たかという期待感をもって、この事態を迎えています。昔、沢柳政太郎という京都帝国大学の総長がいました。1910年代のことです。彼は、学問は、何処の国の学問であっても独創的であるべきだと思いました。何時までも「洋学」の輸入だけに頼ってはいけなかったと思いました。だから学生が既知のことを学ぶことにあくせくし、試験漬けになっている様子を強く憂えました。西欧の大学のように、ゼミナール中心の、学生の主体性をもっと活かされる大学にしないといけないと思い、大学改革に乗り出しました。しかし残念ながら「洋学」流の大家たちの猛烈な反発にあい、あえなく挫折をしてしまいました（京大事件）。

それから100年、日本の大学は殆ど進歩していません。授業といえば、相変わらず講義中心の——学生からみると受け身的な——授業だし、教えられる内容も「洋学」流を脱していません。独創性を育むような教育になっていないのです。だから入学試験も、既存の知の理解・消化能力だけを試し、その学び、研究する者としての主体性や意欲、感性を試すものにはなっていないのです。

その怠慢が、今現実から告発されているのです。日本社会はもうとっくの昔に、独創的でなく、物真似だけで生きられる時代を終えています。それは一度でも世界のトップランナーになった国の運命です。それに大学も気づけと言われていたのかのようです。それが今回の入試改革の底にあることのように、私には思えます。

ということは、今回の入試改革に、入試の改革だけで対処してはいけないということです。大学もそうですが、初等・中等教育も根本的に変えていかなくてはなりません。人の独創性を育む教育に。



そこで私が気になっていることが一つあります。中等教育課程で教えられる科目が少なすぎるということです。日本の高等学校には、哲学も心理学も社会学もありません。国語はあっても、「文学」や「詩」はありません。大学にある専門の殆どは高等学校にありません。中等教育課程の教育が、極端に狭くつくられているのです。ひとえに入試をやり易くするための配慮です。答えよりも解き方が問われる数学の入試、をマークシート方式でやることのできる国ならではの、教育課程のつくり方です。しかしそれで本当にいいのでしょうか。子供たちは、結局殆ど何も知らずに、大学進学時に専門を選ぶことになっているのです。それに大学における教養教育の貧弱さが拍車をかけています。やはり学ぶ者の主体性・独創性を育む為には、きちっと選択肢を提示し、必要な「悩む時間」を与えてやる必要があるのではないのでしょうか。小学生や幼稚園児にも同じ構えで臨むことが大切です。

その点ではアカデミックガイダンス等に積極的に取り組んでいる、本学の附属中等教育学校には希望があります。それを今後は「教養教育」の名に値するレベルまで発展させていってほしいと思います。

本学の入試改革の取り組みも、そうした取り組みと連動した時、初めて希望のある取り組みになっていくのではないでしょう。そう確信しています。



サイエンスキャンプ「ScAN」の効果 附属中等教育学校 吉田隆

昨年まで「コアSSH」と呼んでいた枠組みが、今年度より、「科学技術人材育成重点枠」となり、海外連携の分野で2年間の研究指定を受けました。

私は、I期のSSHに申請する段階では、申請に消極的な立場でいました。研究開発学校を6年連続で取り組み、教員の研究疲れが懸念されたからです。しかし、SSHの指定を受けてから、最先端の科学者の講義を受けることができ、生徒が生き生きと活動する姿を間近に見て、SSHの指定を受けることでしか得られない波及的効果の大きさに気づきました。

サイエンスキャンプそのものに参加するのは、今年が初めてのことでした。以下、私の目から見たScANの目的や意味、可能性について述べてみたいと思います。

ScANの目的は、「海外生徒と協働で理数の問題解決を行う中で、幅広い理数の能力と国際力を育成する」「大学、企業と連携したワークショップの実施や評価研究を行い、高大接続の研究を行う」というものです。特に、ワークショップの活動を通じて、どのような観点で生徒を評価するかの枠組

みを創り出すところに、このキャンプの主眼がありました。運営指導委員の先生方やワークショップの講師の先生方が、生徒の何を評価されるのかが最たる関心事でありましたが、率直に言って、参加生徒が中学3年生と高校1年生であることを考えると、高大接続の視点から評価するには少々無理があります。

私が考えるScANの目的は、海外の生徒たちと日本の生徒たちが、ひとつのワークショップにおいて、学習する「場」を共有するところにあると思いました。アイスブレイクとして奈良市内を散策したり、寝食を共にしながら夜にはゲームに興じたり、一見、学習とかけ離れた活動が組み込まれています。これは、母語ではない第二言語を用いて、ワークショップの講義を聞き、生徒同士が話をし、誰かがイニシアティブを取りつつポスターを作るという学習の「場」を作り上げるための仕掛けです。参加生徒を東（南）アジアという共通の枠で捉えたとしても、学習の意味づけや動機づけ、学習への姿勢の違いが顕わになる「場」であったと思います。そしてサイエンスキャンプの仕掛けの重要なところは、サイエンスワークショップをコンテンツとしているところにあります。サイエンスという核が存在することの意味は大きいと思います。ScANに参加した生徒たちをつなぐ共通の枠組みは、サイエンスのもつ真理であり、サイエンスに挑む探究心にあるのだと思います。

ScANに参加した生徒が、サイエンスのおもしろさに目覚め、さらに学習を深めたいと感じることこそ、この取組の着地点があり、海外の生徒と交流する意味があるのだと思います。異文化理解が主目的ではないものの、自然と交流の中で異文化理解が進み、さらにはサイエンスに対する価値観の違いが顕在化してくるところに、ScANの可能性があります。その意味では、ScANの評価指標は、生徒の中のサイエンスに対する捉え方の違いや、学習の意味を明らかにするようなところにこそあるのかもしれない。



終わりに、私自身は、このScANに参加して、ツールとしての英語の重要性に気づくことができました。語学へのモチベーションは、このような交流プログラムに参加していくことによって高められ、語学力がつくことによってさらにサイエンスの研究が進んでいくものと実感しました。ScANは、サイエンスという真理を探究するコンテンツを核とした、学習へのモチベーションを高めるプログラムとして、今後も本校が大切にしたいSSHの取組の一つです。



幼稚園・小学校トピックス ～幼小交流授業～

附属小学校 西田 淳

小学校と幼稚園は、幼小一貫教育校を目指して教育研究を行っています。その研究の一環として、小学校教員が幼稚園で授業をし、逆に幼稚園教員が小学校で授業を行う試みを始めています。2013年12月16日(月)に、5歳児ほし組に授業を行いました。その実践の様子を報告します。

～何をするのかなあ～

小学校で1時間目の学習を終えると足早に幼稚園へ向かった。

「ほし組さんのお部屋はどこですか。」

案内されて保育室に向かうと、整頓された椅子に子どもたちが行儀よく座っていた。「待ってくれていたのだな。」と一目でわかった。「何をするのかなあ。」「どんな先生なのかなあ。」「楽しみだなあ。」そんな思いが子どもたちの目から伝わってきた。

～ふたりでおはなしよう～

幼稚園での学習(保育)ということで、いつもとは違い、「書く」という活動が当たり前でない。そのため、「聞く」「話す」を中心に考えた。

初めに、「ふたりでおはなし」という、絵を見ながら対話をする活動を行った。絵には、家や庭が描かれており、そこには多くの動物がいる。

教師 「何がいますか。」子ども「牛がいます。」

教師 「どこにいますか。」子ども「木の下にいます。」

というようなやりとりを考えていたのだ。しかし、子どもたちは賢い。私が「何がいますか。」と聞くと、「牛が木の下にいます。」と初めから答えた。何人かの子どもたちと対話をしたが、多くの子が動物と場所をまとめて答えた。教師の思うようにはいかないもの、それが子どもたちである。

～リズムを感じて読もう～

次に、谷川俊太郎の詩を群読した。「うんとこしょどっこいしょ 歌が心を持ち上げる」リズムを感じながら、子どもたちは楽しみながら声に出していた。

「詩の内容に合わせて、個々に考えた動きをしてみよう。」と促すと、大きな身振り手振りをしながら楽しむこともできていた。一生懸命声に出している子どもたち。何とも微笑ましい姿だった。



～お話を聞いて楽しもう 「寿限無」～

最後に、時間があればしようと考えていた古典落語「寿限無」の語りをした。子どもたちにも馴染みのあるお話のようで、大きな声をあげて笑っていた。

ほし組担任の角田先生によると、子どもたちに感想を聞くと「寿限無」が一番印象に残ったようであった。「やはりそうか」という思いとともに、わかりやすい面白さだけでなく、対話や表現することの楽しさを伝えるにはどうすればよいのかという課題が持てた実践であった。2014年1月9日(木)の、5歳児つき組での学習が楽しみである。





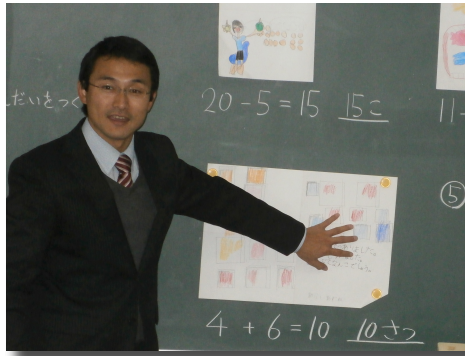
“なりきる”こと

附属幼稚園 鎌内菜穂

今年で9年目になる幼稚園生活。副担任として3歳児を担当したことはあったが、担任として3歳児と関わるのは初めての経験である。

今年は特に子ども達と一緒に“なりきる”ことを楽しんだ。猫の冠をかぶれば「にゃごにゃご」と言い始め、なき声も動きもすっかり猫。

「おばけがいる！」と言えば、いかにもそこにおばけがいるかのように振る舞う。少しのアイテムと教師の言葉、そこに子どものイメージも加わるといろいろな世界が広がっていく。一方で、「そんなことはしない」と言い出したらてこでも動かない。なぜそう言うのかその理由をさぐりながら、気持ちが切り替わることを気長に待ち、少しでもできればしっかりと認める。このようなゆったりとした時間の中で、集団生活の基礎を身につけてきつつある子ども達の、これからの育ちが楽しみである。



附属小学校に赴任して

附属小学校 豊田雅樹

昨年4月に、愛知県の公立中学校から本校に赴任しました。まさか小学校の修学旅行で訪れた、思い出の地で生活することになるうとは思ってもみなかったのですが、この機会を与えられたことに感謝しています。今では、鹿を見ることにも慣れ、夜、帰り道に遭遇して驚くこともなくなりました。

現在、1年生の担任をしています。昨年まで中学3年生を担当していたこともあり、9年分の心と体の成長と、様々な反応の違いを楽しみながら過ごしています。「中3から小1では、大変ですね」と言われることもありますが、実際は、それほどでもありませんでした。それは、私自身の中に、「子どもはできる存在であり、様々な課題に対する答えを既にもっている。教師の役割は、それを引き出すことである。」という教師の構えがあり、これと同じ考えが附属小学校にあったからかもしれません。当然、中3と小1では、できることに差があります。でも、小1は小1なりに「できる」のです。それも、私が思う以上のことをやって見せてくれるのです。子どもたちの可能性を再確認し、わくわくしている今日この頃です。私も、子どもたちを見守りながら、ともに成長できる教師であり続けたいと思っています。



「コロキウム」奮闘中

附属中等教育学校 田中友佳子

これまでの自らの実践を壊して、新たなものを創る。これが私のスタイルであり、その象徴が、5年「コロキウム」の実践である。

コロキウムは、昨年度開講された学校設定科目である。15名ほどの生徒とともに、一年間かけて「なぜ数学を学ぶのか」を考えながら、自らの数学観を見つめている。昨年度は、読書会を中心としたグループ活動に力を注いだ。今年度も、同じように進める予定が、目の前にいる生徒たちを見て、壊すことを決意する。彼らの数学観をうまく引き出すためには、ほかの手段がよいのではないかと感じたのである。そこで今回は、「数学における美しさとは何か」をテーマとした話し合いなどを行った。縦横比がさまざまな長方形を見て、どの長方形が最も美しいのかを直感で答える。これだけでも個人差があって興味深い。では、もっとも美しいと思う定理や公式は何か？その理由は？この話し合いを通して、生徒たちが数学に関して大切にしていることが見えてきたように思う。しかし、さらに深めることができたのではないかという反省が残る。これが、次回の創り上げることへとつながるのかもしれない。ここでふと気づくのは、私自身も数学観を「壊しては、創る」を繰り返しているのではないかということだ。